王子様に囲まれて

空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
王子様に囲まれて

【Ｎコード】
Ｎ６９８８Ｚ

【作者名】
空

【あらすじ】
普通の女子高生・愛実の通う青銀学園には３☆ｓと呼ばれる王子様３人がいる。愛実は３☆ｓが大嫌い。席が近くなったことをキッカケに、３☆ｓに関わらざるを得なくなった。そして、３☆ｓのリーダー・海都は実はちょー俺様だった！３☆ｓに関わっていくうちに、３人の本当の姿が見えてくる。大嫌いなのに、惹かれてしまう。愛実が最後に選ぶのは？！

大嫌いな王子様

あたしは空川愛実（そらかわあいみ）。青銀学園に通うごく普通の女子高生。

「キャー３☆ｓよー（スリーエス）！！！！！」

「キャー！！！！カッコイイ！！！！」

この学園には３☆ｓと呼ばれる３人組がいる。

水山海都（みずやまうみと）。高２

クールで大人びている。３☆ｓのリーダー的存在。

月岡力弥（つきおかりきや）。高２

しっかり者で、頼りになる。３☆ｓの兄貴的存在。

星沢直樹（ほしざわなおき）。高２

お調子者で、天然。３☆ｓのムードメーカー的存在。

３☆ｓ　３ｓｔａｒ　つまり星の３人組ってわけ。

３☆ｓはこの学園の王子様らしい。

はっきり言って、あたしは興味ないが。

「おっはよー」

「琉穂（るほ）、おはよ」

「相変わらず、３☆ｓは朝からすごいね。」

「どこがかっこいいのか、あたしには全然わかんないんだけど。」

「愛は、嫌いだもんね。あーゆータイプ。」

そう、あたしは３☆ｓが大嫌いだ。

自分はモテるとでもいうような、自分をカッコイイと思っている奴

が大嫌いなんだ。
それなのに、今あたしは3☆sの3人と同じクラスなんだ・・・。

その日のホームルームで、あたしに最悪なことが起きた。
「おーい！今日は席替えするぞー。いやーずっとしようと思っていたんだが、
なかなか出来なくてなぁー。」
という担任のにしもっちゃん（西本）の一言から始まった。
「くじここにあるから、男子は坂口から、女子は浅田から引いてけよー。
引いたら、黒板に書いてある座席と同じとこに移動しろよー」
そう言われ、くじを引いてみてみると、窓際の一番後ろだった。
「愛ーどこだったー？」
「窓際の一番後ろー。」
「マジー？あたしは廊下側だよー。」
「めっちゃ遠いね・・・。」
「本当だよー。ってか、3☆sはどこなんだろうね？
みんな狙ってるし！」
「そだね？」
すると、クラスの女子がやっぱり3☆sに席を聞いていた。
「海都君たち、席どこ？」
「俺ら、3人ともみんな近くだよ！窓際の後ろ！」
「！？」
あたしは一瞬耳を疑った。

「愛！愛の隣、海都君だよ！で、その前が力弥君と直樹君！」
「ウソでしょ・・・。」
そう。最悪なことにあたしは3☆sにかこまれてしまった。
「おーい！早く席移動しろよー！」
そして、3☆sはあたしの隣、前、斜めになってしまった。

「どうもっ！これからよろしくね！空川さん♪」
最初に声をかけてきたのは、やっぱり星沢直樹だった。
「・・・どうも。」
無視をするわけにもいかず、下を向いたまま挨拶だけ交わした。
あたし、これからどうするのー（泣）

王子様の素顔

休み時間、あたしは逃げるように琉穂のところに行った。
「琉穂ーもうマジ最悪。」
「よりにもよって全員集合だもんね。」
「うん。もうありえないよー。」
「まぁ、しょーがないよ。それに、狙ってた人のが多いんだから、そんなこと言ったら、起こられるよ。」
「喜んで変わってあげるっつーの。」
「まぁ、にしもっちゃんに言いな。」
「早く席替えしてほしいよー。」
「ドンマイ。次移動教室だから行こ。」
「うん。」

ありえなさ過ぎるよ・・・。
角だから、3☆s以外に人はいない。
つまり、嫌でも関わらなくちゃいけないってわけ。
マジで最悪・・・。早く抜け出したいよー。
なんて思いが通じるわけもなく、あたしは3☆sと関わることに・・・

・

そして、1週間がたった頃、あたしはある秘密を握ることになる。
それはある日の放課後、あたしは1人教室に残っていた。
日直の仕事を終え、帰ろうとしたとき、空き教室から、誰かの声が聞こえた。
「海都君のこと好きなんだけどさぁ。あたしと付き合わない？」
それは、同じクラスの谷口さんが水山海都に告白しているところだった。

あたしは、ドアの影に隠れて、その現場を見ていた。

ガタッ

だが、その拍子にドアにぶつかってしまい、見つかってしまった。
「あんた何？」
「あっえっとー。」
言い訳を考えていると、水山海都が近づいてきた。
「谷口さん。すみませんが、僕はこの子と付き合っているので。
あなたとは、付き合えません。」
「えっ？！」
あたしは、突然の出来事に頭がついていかなかった。
「ちょっと何言って・・・！！」
反論しようとしたが、水山海都に手で口をふさがれてしまい、何もいえなかった。
「えっあっ・・・。」
谷口さんは、そのまま走って帰っていった。
「ちょっとあんた何言ってんのよ！なんであんなこと言うわけ！？信じらんない！！！」
水山海都は何も言わなかった。
「ちょっと聞いてんの？！」
「・・・うっせーな。」
「はっ？！」
それは、とても低い声で、さっきまでの王子様キャラとはまるで別人だった。
「いちいちうるせーな。安心しろ。お前には興味ねぇから。」
「はぁ？！こっちだってあんたに興味なんかないわよ！」
「お前さ、俺のこと、嫌いだろ。」
「ええ。嫌いよ！みんなに騒がれて、いい気になって。自分をカッコイイとか思ってるあんたが大嫌いよ！

それに、こんなに俺様のくせに、あんな王子様キャラなんか演じちゃって。マジありえない。」
「フッ。お前気に入った。おい、明日から昼休み屋上来い！」
「はぁ？！行くわけないでしょ。」
すると、水山海都は近づいてきて、あたしは壁とあいつに挟まれてしまった。
「な、何よ！」
水山海都は壁に手をついて、あたしを見下ろしてきた。
長身のせいで、すごく見下ろされてしまう。
「ぜってー来いよ。愛実。」
あいつはあたしの耳元でそうささやくと、帰っていった。
「何で、あたしが・・・。」

悪魔の王子様？！

次の日の昼休み。

「海都君、お昼一緒に食べない？」
「すみません。約束をしていますので。」
水山海都は、チラッとあたしのほうを見て言った。
「そっか。残念。」
「愛ーお昼行こ！」
「うん！」
琉穂にそう答えたとき、水山海都に軽く睨まれた。
「あー琉穂ごめん。今日、約束あったんだ。ごめんね。」
「そっか、わかった。」
「じゃあ、またあとでね。」
「うん。」
あたしがそう答えたのを確認するかのように、水山海都はこっちを見てから、教室をでて行った。
あたしも、教室をでて、屋上に行った。

そして、屋上に行くと、３☆ｓがそろっていた。
「おい！おせーぞ！」
「遅いって何よ！」
「早くこっち来い！」
「あー空川さんじゃん！」
「どうも。」
「君だったんだね。海都の気に入った子って。」
「おう！こいつ、おもしれーんだもん！！」
「面白いって失礼ね！で、わざわざこんなとこにまで呼び出して何

の用？」
「まぁまぁ、空川さん。そんなにカリカリしないで！俺、星沢直樹！よろしく！」
「あ、空川愛実です。」
「俺は、月岡力弥。よろしくね。」
「あっ、はい。」
「愛実ちゃん、敬語じゃなくていいよ。俺らタメなんだから。」
「そうだよー！ねっ愛ちゃん！」
「気に入られてんじゃん！愛実。」
「で、何の用？」
「俺の昼飯買って来い。っつか、お前の昼飯くれ！」
「はぁ？！あんた何言っちゃってんの？！」
「別に、そのままの意味だけど。」
「ありえないから。それにあたし、お弁当だし。」
「なら、その弁当くれ！」
「あんた、さっきから何言ってんの？ありえないから。」
「早くしろっつーの！」
「嫌よ！あたしのお昼ご飯がなくなるでしょ！」
そう言い返したときには、あたしのお弁当は水山海都に取られていた。
「ちょっと！返してよ！」
「うまい！！！」
「当たり前でしょ、どんだけ料理してると思ってんのよ！」
「お前、これ自分で作ってんの？」
「そうよ。」
「愛実、天才！　ってことで、これからも頼むぞ！」
「はぁ！？」

こうして、あたしは3☆sに、
いや、あの悪魔に気に入られてしまったのだ。

嫌がらせ

それから、あたしは毎日屋上に行くようになった。
大嫌いだと思っていた3☆sとも関わっていくうちに、3人の本当の姿が見えてきた気がした。

そして、2週間がたった頃だった。
朝、いつも通りに学校に行き、教室に入ると、黒板に何か落書きがされていた。
［2年c組空川愛実は卑怯な女。3☆sを脅し、関係を強要。男なら誰でもOK。欲求不満女。いつでも連絡してね～。080－×××－×××］
「・・・なにこれ・・・。」
わけがわからなかった。どうして・・・？何で・・・？
すると、勢いよく琉穂が教室に入ってきた。
「愛！他のクラスにも書かれてる！！」
あたしは、混乱したまま、ただ黒板の落書きを消そうとした。
その時だった。

＊海都ＳＩＤＥ＊
俺は、力弥と直樹といつもどおり学校に行くと、なんだか嫌な予感がした。
そのまま、2年の教室のある3階まで上がっていくと、みんなの雰囲気が違うことを察した。
「なぁ、なんか雰囲気っつか空気違わないか？」
そう声をかけてきたのは、力弥だった。
「お前もそう思うか？俺も思った。」
「えっ？何の話？」

「俺、何か嫌な予感がするんだよな。」
「当たらないといいんだけどな。」
教室に入り、その予感が当たってしまったことに気づいた。
黒板に書かれている落書きは、愛実を中傷する落書きだった。
そして、愛実がその落書きを消そうとしていた。
けれど、全身が震えているようで、うまく消せていなかった。
「あっ、海都君・・・。」
クラスの誰かが俺に気づいたことで、みんなが俺のほうを向いた。
そう、愛実も。
俺は、苛立ちながらも精一杯平然を装って、愛実のところへ行った。
「海都くん・・・。」
「海都君、この子に脅されてるんでしょ。だから毎日、お昼だって一緒に食べてるんでしょ。
こんな子最低じゃないの。脅してまで3☆sに近づこうなんて。」
「あたしは別に・・・！」
「谷口さんですか？こんな嘘を書きたてたのは。」
「えっ・・・そんなわけないじゃない。それに、本当のことじゃない。」
「冗談にしては度が過ぎるんじゃありませんか？空川さんには、脅されてなんていませんよ。むしろ、僕たちがお昼を誘っているんですから。ねぇ、力弥、直樹？」
「そうだよ。」
「空川さんに悪気はないと思いますが。こんな落書きを書くとは、いくらなんでも、子供じみていますよ。谷口さんは、そんな小さな子供ですか？」
俺は、いつもの王子様キャラで、谷口に釘を刺した。
「そんなわけないじゃない！ほら、ミカ、アキ早く消すわよ！」
そう言うと、谷口は落書きを消しだした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6988z/

王子様に囲まれて

2011年12月27日20時50分発行